

## 21. 西神吉町 八幡神社の祭礼

加古川市域の神社祭祀には、各ムラの神社での祭祀とその神社を撰社とし、数か所の氏子ムラを含む大きな神社での祭祀の二つがある。つまり、人びとは二つの神社の氏子であり、二つの神社を祭祀するということになる。そして、夏まつりは各ムラの神社で催され、秋まつりは大きな神社に各氏子ムラが集まり、盛大な祭礼が営まれている。しかし、現在では、後者のみに参加し、前者を簡単に済ますムラが多い。

ここでは、秋まつりの一例として、神吉八幡神社の祭礼について報告したい。なお、調査対象は、神吉八幡神社の氏子ムラのうち、宮前・西村・大国の三地域である。

①

### 1. 神吉八幡神社の沿革

神吉八幡神社は、西神吉町宮前字宮山に鎮座している。現在の祭神は、菅田別命である。この神社は、かつて「妙見社」と称し、天下原の毘沙門、大國、宮前と遷座し、現在に至っているという伝承を持つ。その間の事情は、延宝8年(1680)に神宮寺中之坊で記された「八幡神社縁起」に詳しい。しかし、今回の調査では、この縁起の現存を確認することができなかった。したがって、『播磨鑑』、『増訂印南郡誌』、『兵庫県神社誌』に紹介されている縁起文からその内容をまとめてみたい。

②

播磨国印南郡神吉庄の妙見山宝林寺中之坊の妙見大明神は、人王102代称光天皇の御宇、応永年中(1412~1427)9月23日に圭光山鞍馬寺の霊巖に明星が飛来したことに始まる。この時、明星は虚空蔵菩薩であるという託宣があり、以後人々の厚い信仰を集めた。明星が来影した圭光山鞍馬寺の開基は不明であるが、この寺には、石面に毘沙門天王と不動明王を彫刻したものがある。この岩趾のあるところを天下原という。

この後、大國村に鎮壇を建て、さらにその北方にそびえる高山に神社を構えた。これを上宮と称し、神吉11か村の氏神とした。このことによって、大國村の社を古宮という。今に至るまで、毎年9月23日に神職が来て祭儀がある。童子が一人、身体を清めて、衣装を正して、古宮及び上宮に歴参する儀式である。

また、八幡宮を勧請し、上宮に合祀して鎮守の神とした。惟うに、この山の辺は、織田信忠が陣を張った古戦場である。『信長記』に神吉・志方の間の山とあるのは、この山のことである。さらに、上宮の東に薬師堂、西に観音堂を建立している。(以下略)

以上が縁起の概略である。明星=虚空蔵菩薩と妙見大明神との関わりなど不明な点もあるが、神吉八幡宮の来歴が伝承に基づいて記されている。

③

なお、『兵庫県神社誌』には、

称光天皇の御宇応永年間の創立にして播磨国印南郡神吉の庄天下原村圭光山鞍馬寺の境内に鎮座せしも、後ち神吉の庄大國村に遷座し妙見大明神と称す次いで嘉吉の兵燹に懼り社殿悉

く焼失せしかは聖武天皇の行宮と伝ふる神吉庄宮前は北の山なる地に社殿を建て妙見山宝林寺中之坊妙見大明神と云ひ、其大国村旧地を御旅所とす次いで御旅所に又妙見大明神の祠を建てしかば爾後当社を上宮と云ひ御旅所の祠を下宮と云ふ天文年間神吉城主中務少輔社殿を造営し江戸時代姫路藩主池田輝政は慶長十八年十月に所司代板倉伊賀守は元和二年に何れも社領五石を寄進せちるゝ等崇敬最も厚く且つ毎歳の例祭には家臣を参向せしめ親しく代参なさしめたり寛永九年雷震ひ社殿其他の营造物悉く烏有に帰し天和三年五月二十四日之を再建せり即ち現今の社殿是なり明治維新の際神仏混淆を禁ぜられたるを以て妙見大明神を八幡神社と改称し明治七年二月村社に列し昭和五年十月郷社に昇格す

と、下線部のように「八幡神社縁起」にない由緒が記載されている。また、『増訂印南郡誌』は、この神社の創祀、応永年間を応永3年(1414)のこととし、宮前への遷座を応仁2年(1468)のこととする。いずれも典拠は不明である。現在では遷座地のみが伝承されている。

次に境内社について見ていきたい。現在、神吉八幡神社には、本殿、拜殿の他、稲荷神社・愛宕神社・大歳神社・八坂神社の4社が境内社として祀られている。しかし、寛保2年(1742)の「神吉組明細帳」<sup>⑤</sup>によると、

妙見大明神本社	壹丈 老間
舞殿	式間 三間
舞台	式間 三間
桒屋	五間 式間
祇園社	式尺四方
社日社	式尺四方
拜殿	六間 式間半
階掛り	六間 老間
御輿蔵	式尺四方 式間
愛宕社	式尺四方
閻神	三間 老間半

とある。『播磨鑑』にも「舞殿、拜殿、舞台、橋掛、桒屋、門守殿、石鳥居」と見え、近世には現在より多くの建造物があったことが知られる。そして、現在見ることのできない境内社に社日社・閻神があった。なかでも、閻神が他の境内社より大きいことに注意される。

最後に氏子ムラについて見ていきたい。「八幡神社縁起」には、

そもそも当社の氏子村落は、神吉村・天下原村・大国村・宮前村・下富木村・清水村・西脇村・長慶村・西村・中西村・磯部村の十一か村である。

とある。しかし、伝承では、大国・鼎四部落(長慶・西脇・富木・清水)・西村・中西・宮前・神吉・天下原・砂部・出河原が氏子ムラであったが、いつのころからか出河原・砂部は、出河原の宮の祭をするようになったので、神吉八幡神社の氏子ムラから抜けたという。

## 2. 文政の祭礼絵巻

神吉八幡神社には、文政3年(1820)の奥書きをもつ絵巻物がある。この絵巻には、祭礼行列の様子が描かれており、かつての祭礼を知るうえで貴重な史料となっている。この絵巻に見える行列は、小頭人を中心としたものと大頭人を中心としたものとの2つに分けることができる。

それぞれについて人数・持ち物などをまとめると下表のようになる。

役名	人数	備考
(シデ振り)	2	子供 紅白のシデ
御先太鼓(太鼓)	2(4)	子供
御先太鼓(かつぎ手)	28(32)	「天幕狸々緋、蒲団屋根」はだし
猿田彦	2	「緋縮緬」面を被り、棒を所持
母衣花(ホロ花)	14	「凡百人斗、二歳より十三歳迄」男女、背負うものと手にもつものあり
母衣花の付添い	6	
旗	1	「奉納妙見宮」白色の旗 陣笠・帯刀(一本)
母衣花(ホロ花)	8	
母衣花の付添い	3	
弓	2	「武挺(張)」陣笠・帯刀(二本)
鉄炮	2	「武挺」陣笠・帯刀(二本)
(不明)	2	衣装は前二者と同じ 持ち物なし
台笠	1	帯刀(一本)
立傘	1	帯刀(一本)
挟箱	2	帯刀(一本)
白幣	1	冠・白の狩衣・帯刀(一本)
小頭人	1	乗馬 冠に花あり
(馬)	1	
警護	6	棒 棒を所持
太刀	1	子供
鎧	1	帯刀(一本)
長刀	1	帯刀(一本)
床机	1	帯刀(一本)
茶弁当	1	帯刀(一本)
小太鼓	11	子供 二人でかつぐ

〈表㉔ 小頭人を中心とした行列〉

註. 役名・人数の( )は、絵巻には記載されていないが、存在が推定できるものである。

役名	人数	備考
(シデ振り)	2	子供 紅白のシデ
御先太鼓(太鼓)	2(4)	子供
御先太鼓(かつぎ手)	27(32)	「天幕黒天輪紋、蒲団屋根」はだし
猿田彦	2	「上緋縮緬」面を被り、棒を所持
母衣花(ホロ花)	7	「凡百人斗、二歳より十三歳迄」男女、背負うものと手にもつものあり
母衣花の付添い	3	
旗	1	子供 「妙見大明神 願主」白色に赤字の旗
母衣花(ホロ花)	12	最後の一人のみ 自然の枝を持つ
母衣花の付添い	3	
御弓	2	「武張」陣笠・帯刀(二本)
鉄炮	2	「武張」陣笠・帯刀(二本)
長柄鎧	2	
毛鎧	2	
鉾	2	
太刀	1	子供
従士	2	陣笠・帯刀(二本)
金幣	1	冠・狩衣・帯刀(一本)
(シデ振り)	2	子供 紅白のシデ
神輿	14(16)	「八角」はだし
警護	4	二人は棒 棒を所持
御検所御役人	7	棒 帯刀(二本)
別当宝林寺	1	
(かつぎ手)	6	
神子	1	女性 冠
白幣	1	冠・狩衣・帯刀(一本)
大頭人	1	乗馬 白の狩衣
(馬)	1	
供尾人	1	大頭人と同じ衣装
家子	1	大頭人と同じ衣装
警護	5	棒 棒を所持
太刀	1	子供
従士	2	陣笠・帯刀(二本)
鎧	1	
台笠	1	
立傘	1	帯刀(一本)
挟箱	2	
茶弁当	1	
合羽籠	1	帯刀(一本)
小太鼓	10	子供 二人でかつぐ

〈表㉕ 大頭人を中心とした行列〉

以上のように、この絵巻から近世には、総勢約260人という盛大な祭礼が営まれていたことがわかる。しかも、衣装・持ち物に関しては詳細に描かれており、祭礼だけでなく、当時の民俗を知るうえでも興味深い史料である。それでは、この絵巻に見える祭礼はどのような形で継承されているのであろうか。次節では、聞き書き調査を中心に現行の祭礼についてまとめてみたい。

### 3. 現行の祭礼

**祭日・ジンジ** 祭日は、近世では9月23日、戦前は10月16・17日、戦後は10月14・15日、近年は10月の第2日曜日と変遷している。この祭礼は、氏子ムラが交替で当番となってジンジをつとめる。当番は、宮前—天下原—神吉(東)—神吉(西)—中西・西村—大国—鼎の順にまわる。ただし、天下原は14年に一回(二順目に一回)となる。これは、氏子ムラになった時、ムラの戸数が少なかったためである。この当番は秋まつりのときのみ機能する。

**頭人** 年のはじめに頭人を定める。頭人は、6～8歳くらいの男の子で、総代が話し合っで決定する。ただし、身内に不幸があった家は、一年間ケガレているので頭人を出せない。頭人が決まるとすぐによい日を選んで高砂の浜に行き、身を清める。この時、頭人・頭人の父親・総代・神官が参加し、神官が持ってきた海のもの・山のものを供え、海水を体にかける。高砂の浜から帰ってくると頭人の家で参加者・近所の人たちが集って食事をする。

この日からまつりの当日まで、頭人の家のしるしとして小さな幟を家の出入口に建てる。この幟には、「頭人」という文字と頭人の氏名を記す。頭人の家を示すものとして、「神社調書」⑦は、陰暦九月十七日の当日其家の門先に祭壇を築き氏神を奉斎す。祭壇の様式は芝草を盛り重ね周囲には注連縄を曳き廻らし中央に根つきの大榊壹本を植ゑ御神鏡幣帛を結び垂れ其両側に燈籠二基を建つ。

と記載している。また、『増訂印南郡誌』にも、

旧九月十三日王壇築とて氏神を奉斎すべき神居を頭人の門前に<sup>しば</sup>萊草を盛り大榊を植ゑて作り奉告祭を行ふ。頭人は氏子を代表すべきものなれば王壇築きの当日より斎戒沐浴凶事に融れず。

とある。日岡神社の祭礼の際に頭人の家に築かれるオダン(写真図版19ページ)と類似したものが神吉八幡神社においても作られていたことが知られる。

なお、文政の祭礼絵巻に見えるように、頭人には大頭人・小頭人の二人があった。しかし、明治40年(1907)ごろに大頭人は廃止され、小頭人のみとなった。現在では、神宮が大頭人つかわりであるという。

**祭礼の準備** 八朔になると当番のムラに宮から稽古みこしを持って帰り練習を開始する。みこしの稽古は、シデ振りと合せてみこしが練ることができるように練習を重ねる。

まつりの一週間ほど前になると、各ムラから数名ずつが出て、宮の幟・幔幕などの飾り付け、境内の掃除を行なう。この時、大国はムラにある御旅所の掃除を担当する。また、当番のムラは三の注連縄を全て張り替える。この掃除には女性も参加することができるが、本殿の奥を掃除することはできない。

まつり当日の供物は、宮の方で準備が、かつては米一升・鏡餅一升などを各家から供えることとあった。

考
紅白のシデ
黒天鵝紋、蒲団屋 はだし
縮緬」面を被り、 時
人斗、二歳より十 」男女、背負う 手にもつものあり
「妙見大明神 願 白色に赤字の旗 一人のみ 自然の つ
」陣笠・帯刀 )
」陣笠・帯刀 )
帯刀(二本)
衣・帯刀(一本)
紅白のシデ
」はだし
」袴 袴を所持 帯刀(二本)
冠
」衣・帯刀(一本)
日の狩衣
と同じ衣装
と同じ衣装 袴を所持
帯刀(二本)
一本)
一本)
二人でかつぐ

宮まわりのこと  
なく、当時の民俗  
ような形で継承さ  
まとめてみたい。

この他、行列の役に当たった人は、まつりの準備として当日までにそれぞれの衣装をそろえた。

**ヨミヤの行事** 当番のムラでは、夕方になると、頭人・猿田彦・みこし・総代などの役についている人が宮に参詣し、神官にお祓をしてもらう。この日、みこしを担ぐ人は、稽古みこしを宮に返却し、明日の行列に使用するみこしを洗い、晒の切で四隅を縛る。そして、この夜は当番のムラの人たちが、このみこしの番をする。宮から帰ると頭人の家ではおもだった人が集って食事をする。この時、特別な料理はない。

上宮、御旅所では、芝居・浪花節・漫才があり賑った。ヒルミヤの翌日にもゴエンといって同じことを行なうこともあった。また、『播磨鑑』には、

大国村ノ社ニモ舞台有テ本社ニ散楽有リ夜ミヤニ此社ニテニ番勤之  
とあり、近世、ヨミヤに芸能のあったことを伝える。

各氏子ムラでは、青年がムラごとに置かれている猿田彦の面をかぶり、女の子のある家を一軒一軒走り、追い回した。大国には六つくらい猿田彦の面があった。

**ヒルミヤの行事** 午前九時ごろに当番のムラは宮に集合する。そこで全員が神官からお祓を受ける。この時、ミコが2、3人来て鈴を持って神楽を舞う。猿田彦の役2名は、神さんの使いであるので、用水の溜池で体を清める。この後、宮でみこしに神移しの式がある。次いで、宮の前で「みこしの式」がある。「みこしの式」とは、猿田彦が先頭を走り、シデ振りがシデを動かすのにあわせてみこしを練るものである(下図)。宮の正面で3回、両端で5回ずつ練る。

掛け声	チョサ	ヨサ	(3回か5回くりかえす)		ヨイヨイヨイ	チョサヤ	ヨサ	チョサ	ヨサ
シデ 振り									
みこし									

〈シデの振り方〉 註：本図は昭和56年の秋まつりに大国が作成した文書を参考にまとめたものである。

宮での行事がすべて終了すると、大国の下宮(御旅所)まで行列がある。道順は、宮前 — 神吉 — 中西 — 西村 — 大国である。各ムラの広場に立ち寄りながら行列は進む。行列の内容は次のとおりである。

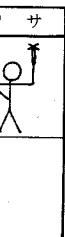
- 【御先太鼓】<sup>オサキ</sup> 2人。ムラの大人がおこなう。行列にさきがけて太鼓をたたき、行列が来たことを知らせる。
- 【金幣】 1人。宮にある金の御幣をムラの役員が持つ。
- 【ホロ花】 10~15人。紙を桜の形に切ったものを竹で作った台に刺した持ち物をホロ花という。これは、役に当たった人が各自で作る、手に持って行列に参加する。花は持って帰るとゲンがよいので行列の最中に沿道の人々が取り合う。持って帰った花は各家で飾っておく。

ろえた。  
役につい  
こしを宮  
は当番の  
って食事

いて同

家を一軒

お祓を受  
の使いで  
宮の前  
を動かす



る。

前 — 神  
の内容は

来たこと

をホロ花  
る。花は  
て帰った

- 【オカチ】 約10人。小学生の男子がつとめる。陣羽織・袴・陣笠という衣装で、鉄砲・弓矢・槍・毛鉾など宮にある持ち物を持つ。衣装は各自で用意する。
- 【御幣】 1人。宮にある白い御幣をムラの役員が持つ。
- 【頭人】 1人。きれいな着物、袴をはいて、冠、おしろいをつけ、馬に乗って行列に参加する。
- 【猿田彦】 2人。頭人を守るために前後1人ずつ付く。2人がかぶる面は異なる。1人は口を閉じ、もう一人の面は口を開いている。綿入れの着物で足元をくくった袴をはき、1m70cmくらいのカシの棒を持つ。この役は、青年団の中で体力のあるものがつとめる。
- 【シデ振り】 15～20人。ゆかたで化粧まわしをつけ、竹の先に幣をつけたものを持つ。小学校3～4年生がつとめる。シデ振りのなかで一番大きなシデを持ったものをオオシデという。一番年長のものがこの役につく。
- 【みこし】 20人。15歳から30歳までの青年で、身内に不幸のないものを選ぶ。衣装は、<sup>あさぎ</sup>浅葱のハッピに白の猿股、晒で井筒に編んだたすきを掛けたものである。棒鼻(みこしの棒の先端を担ぐもの)の4人は長襦袢を着る。戦前は全員裸に締込であった。棒鼻の他にカツギといい、みこしを練るときにみこしの下に入る役が2人ある。
- 【猿田彦】 2人。頭人の場合同様にみこしの前後に1人ずつ付く。
- 【神官】 1人。神官も馬に乗る。馬はムラにある農耕馬を使用する。ムラに馬がない場合は志方から借りることもあった。なお、現在の神官、北山氏は、父親の代から神吉八幡神社の神官である。
- 【警護】 5～6人。紋付羽織・袴で行列の監督をする。ムラで用意した長さ1m50cmくらいの青竹を持っていた。

警護の後に見物の人々が続く。なお、この行列の他に各ムラで屋台・ふとん太鼓などを持っていた。大国・西村は屋台、神吉はふとん太鼓であった。西村の屋台は、4人の子供が太鼓をたたくものであった。この太鼓を練習することはない。みこし・屋台・ふとん太鼓は、道中で各家からハナ(お金)をこよりでつけてもらう。その時にハナを出した人の名前を読みあげる。

行列が御旅所に到着すると「みこしの式」があり、供物を献じて神官の祝詞がある。この時にミコがついてきたこともあった。その後、昼食のために一時間ほどの休憩がある。昼食は各家で用意する場合とムラが用意する場合がある。料理は、鯖鮓・巻鮓などである。これはまつりの時の料理である。

休憩した後、行列は宮へ帰る。帰路は、大国 — 中西 — 神吉 — 宮前、大国 — 西村 — 鼎 — 宮前などである。天下原は宮から少し離れているので、みこしが回ることはなかった。宮に到着するともう一度「みこしの式」があり、次いで屋台が先着を饒いながら宮へあがり、神を本殿に戻して午後4時ごろに祭礼はすべて終了する。

#### 4. 神吉八幡神社をめぐる民俗

最後に、神吉八幡神社の他の行事、祭礼周辺の民俗に関して報告したい。

**初宮参り** 秋まつりのヨミヤの日、誕生になるかならんかの子を母親、祖母が宮につれてきてお祓をしてもらう。これは氏子になりますという意味でおこなう。子供には宮参りの晴着を着せる。男の子であれば、紋付・袴である。近所・身内のもは子供の着物にお金を水引で結び付ける。

**湯立て** 6月の中頃にミコさんが来て、病気をしないように（夏やせしないように）と釜で湯をたく。祈禱をしてミコさんが神に湯をつけてまく。この行事は上宮、下宮（御旅所）の順で両方おこなう。

**厄神祭・春まつり** 2月18・19日に厄神祭がある。この日は厄年にあたる人が参詣し、祈禱を受ける。10年くらい前から5・6升の餅を作り、餅まきをする行事が始った。

5月15日には春まつりがある。これはお宮で式があり、宮総代が上宮に参る。

以上、秋の祭礼を中心に神吉八幡神社の祭祀について見てきた。報告に際しては、聞き書き調査に限定せず、地誌等に引用されている伝承を紹介し、行事の変遷に留意した。

近年、神吉八幡神社の氏子ムラでは、秋まつりにおける行列が復興し、子供もみこしなどを新たに加え盛大に営まれている。こうした機会に、かつての祭礼の様子を書き留め記録することは重要なことと思われる。この報告がその一助となれば幸いである。

この報告をまとめるにあたっては、井上正氏（明治44年生）、松井則定氏（大正14年生）、田中正一氏（明治41年生）にたいへんお世話になった。また、調査の際には、関西大学学生中村慶太氏の協力を得た。最後になったがお礼申し上げたい。

#### 〈註〉

- ① 西村の八王子神社の夏まつりに関しては、西尾正仁氏の報告（本書36ページ）を参照されたい。
- ② 『兵庫県神社誌』（兵庫県神職会編、昭和12年3月）所引「八幡神社縁起」には、  
爾治延宝八上章瀆灘孟秋日 神宮寺中之坊  
紀州南岳桑門谿上之佳宋旭軒雪単深覚欽註  
とある。
- ③ 『兵庫県神社誌』には「八幡神社縁起」の略文が掲載されている。また、『増訂印南郡誌』（名著出版、昭和48年2月復刊）は、「妙見宮由来記」として神吉八幡宮の由緒を書き下し文で紹介している。この両者は、延宝八年の奥書きを持ち、類似した内容を記しているが、細かい点では異なっている。さらに、『播磨鑑』（兵庫県教育図書販売、昭和58年4月復刊）には、「社記云」として縁起の抄出が記されている。この「社記」は、文中

に「猶委悉由縁有本記」と註記されていることから、縁起を見てまとめられたものであることが知られる。このように、神吉八幡神社の由緒に関しては、内容・性格の異なる三種類ある。いずれが縁起の原型を示すものであるのか、現段階では決し難い。したがって、本報告では、内容を要約したものを紹介する。なお、縁起の名称は、『兵庫県神社誌』に従って「八幡神社縁起」とする。

- ④ 『増訂印南郡誌』所引「妙見宮由来記」には、

信にそれ当神社の由緒来歴複雑にして興味深趣なれども其記事今悉く散失して伝はらず。唯口碑を綴り輯めて茲に其大要を記註し置く耳。

とある。

- ⑤ 大国では、下宮（御旅所）から上宮へ移った理由として、「神主が神が場所を移りたがっているとの夢を見たので遷座した。」という伝承を有する。なお、大国では、下宮が神吉八幡宮の元であるという意識が強く、元日の初詣でも上宮へは行かず下宮へ参詣する。

- ⑥ 『兵庫県神社誌』。

- ⑦ 『兵庫県神社誌』。

（大江 篤）